

白い小鳥

美しい森がありました。無憂の木はオレンジ色の花をいっせいに開き、閻浮の木はまだ固いつぼみが細長い葉かげに見えかくれていました。

どちらも高い木でしたが、ひととき高くそびえ、広い木かげを作っていたのは菩提樹でした。



木々の下で子どもたちが遊んでいました。手の届くあたりに、ジャスミンの白い花が良い香りを放っていました。

少女たちはジャスミンをつんで髪にさしたり、一つ一つ香りを楽しんでは花輪作りに熱中していました。

木々の枝をとびまわっていたシマリスやサルも降りてきて、少年たちと遊びました。おだやかなひとときがゆったりと流れていました。

そのとき、どこからか美しい鳥の声がしました。

子どもたちはだれも、手を休め、足を止めてその声に耳をすましました。

澄んでよくとおぼろしい、さえずりでした。

ひとりの少年が声の方へかかていきました。

少年は菩提樹が続くあたりをふりあおっていました。

『何の鳥かしら』と、たれもおぼろに思ながら、美しいさえずりに耳をそばだてていました。

その声がピタリと止まりました。

少女たちがいっせいにふり向くと、少年たちが、木の下のしげみをかきわけていました。

『どうしたのかしら』

不審に思った少女たちが花輪をおいて立ちあがったときでした。

『見つけたよ』

少年が真っ白いものを、両手でそっと持ってこちらへかけてきます。

その後から、大声でどなりながら追ってくる少年がいます。

『待て -、泥棒。それはぼくのだぞ - 』

少年が持っていたのは白い小鳥でした。翼を傷つけられて、そこに赤い血がにじんでいました。追いついた少年が、肩で息をしながらいきました。

『それ、ぼくのだよ。返してよ』

いわれた少年は、体を固くして背を向けました。

『返せよ、返せたら』

力づくで取り戻そうとする少年に、年かきの少女がいました。

『待って、わけを話してちょうだい』

少年は口をとがらせて、後から来た仲間の少年たちこいしました。

「なあ、みんな、この鳥は、ぼくのだよな。ぼくが石を投げて落としたんだから」

「そうだ、そうだ」ときめく声の中に、「ちがうよ」とらっきりした声がありました。

見つけたほうのものだよ。だってあんなにわかりにくい所じゃなかったからね。そうだろう」

「そうだな、ぼくたちみんな、ずいぶん探したもんね」

白い小鳥は打ち落とした方か、見つけた方か、どちらのものなのか、少年たちは声をはりあげてい争いました。

「早くしないと、この鳥、死んでしまうよ」

今までじっとだまって小鳥をたいていた少年が必死で叫びました。

一瞬、静まった子どもたちでしたが、また激しくい争いのりました。

「あのね、ちょっと待ってて」

ジャズミンを髪にさした少女が、森の中へ走ってゆきました。

やがて少女は老人の手を引いて戻ってきました。

老人の瞳は、小さな窓のようにそこだけあいて、白い長い髪と、髭とおおわれていました。

あとは

「話は聞いたよ、おじいさんの話を聞いてくれるかね」

子どもたちは老人の優しい瞳とおごそかな声の調子に、黙ってうなずきました。

『

』

子どもたちの瞳は、いつの間にか、老人のそれと同じになっていました。

(本生経)

『弘典童話』(東本願寺)

白い小鳥

- 1) 「白い小鳥」を読んで下さい。
- 2) 子どもたちは、何のことで、言い争っていましたか。
- 3) 言い争っている子どもたちの、それぞれの言い分は、なになにですか。
- 4) 君は、どちらの考えに賛成ですか。
- 5) 「白い小鳥」の最後の空白のところに老人の言葉を考えて、ここに書いて下さい。
- 6) 原文の老人の言葉を言いますので、書き込んで下さい。
- 7) 君は、「白い小鳥」を読んで、この小鳥の命は、誰のものだと思いますか。
- 8) 君の命は、誰のものだと思いますか。

年 組 番 名前 ()

6)の解答文章

「生きものの命はだれのものか。それは命を傷つけようとする人のものではない。命を育もう、いたわろうとする人のもののだよ。」